

# イワクラ学会会報 5 号の「筑波山信仰」 を読みての所感

名誉会員 茂在寅男



写真 筑波学園都市から見た筑波山（左）と小田山（右）

図の左端に見える小山が城山（旧名 多気山）

表題に示した通りの鈴木旭先生のご研究成果につき、私としては異常な関心を以って拝読させて頂きました。と申しますのは、「筑波山」が私の故郷の山であり、幼年時代からその周辺といわず、近辺の山々の奥の奥まで飛び廻り遊び廻って育った自分であり、土浦中学校時代には「筑波のトラ」と迄のニックネームで呼ばれていて、それを寧ろ誇りに思っていた程だったからでもあります。その筑波に、鈴木先生たちが深いご関心を持ってくださったことに感謝の気持ちを抱き、色々思い、出話など、この際「郷土の人」として述べさせて頂きたく存じ、一筆申し上げたく筆を執らせて頂きました。

先ず第一に同稿の初頁に描かれている「鹿島神宮」や「香取神宮」関係の地図や、「利根川の下流の方向と筑波山の方向の一致」の不思議についてであるが、これ等は一応「自然」によって作られた現象であるので、一応地学関係研究者におまかせ申し上げる事として、私としては人

文学的方面や歴史考古学的方面について考察して見れば、次のような興味ある発見のあることを申し上げておきたい。

拙著「古代日本の航海術」（小学館版、初版は1979年発行）の「緯度測定」の項目の中で論じておいたが、次のような点に注目して頂きたい。

「……『日本書紀』による『国ゆずりの神話』の主役である出雲側の主役である大国主命とコトシロヌシノミコトは、出雲大社と美保神社に祀られている。又その高天原側の主役であるタケミカズチの神とフツヌシの神とは、関東の鹿島神宮と香取神社に祀られている。ところでその両地を結ぶ線（東西方向の線）を引くと、これが大体等緯度の線であることがわかる。しかもそれは本州に於ける他のあらゆる等緯度の線に比して最も長いものである事もわかる。このことから、この様な土地を選んで『国ゆずりの四神』を祀った古代人は、緯度測定の初歩的な技

術や、等緯度の線の長さ（東西距）を測定する技術を持っていたのだろうか・・・と疑ってみたくなるのは当然ではなからうか」と述べておいた。これには追加事項もある。即ちこの「国ゆずりの神話」に出てくるもう一人の神タケミナカタの神を祀った長野県の諏訪神社もこの話題の等緯度線上に有るのである。勿論その精度については半度以内と云う程度の話ではあるけれど、一応考慮すべき話題ではなからうか。

続いて申し上げたい事は、まったく偶然の事ながら、鈴木旭先生達がこの「筑波山の研究」を始めた時点に時期を合わせるかの様に、「J R つくばエクスプレスの開通」と言う一大イベントが起きた。これについて参考になる資料として、「神田明神発行の（マインド）平成十八年版VOL.2」に荒俣宏氏によって「平将門エクスプレスとアキハバラ新文化」と言う記事が掲載されているが、これ又鈴木旭先生たちの「筑波山の研究」に参考になる資料と言えよう。

そこには「平将門千年の悲願」との項目にて、「今年、つくば市と東京の秋葉原を結ぶ未来鉄道『つくばエクスプレス』が開通した。・・・実はこの新鉄道には千年来待ち望まれた『将門の悲願』の実現と言う歴史的な意味づけがある。」という書き出しで、一般人にとっては意外と感ずる様な着想で筆を運んでいる。そこには、京都を中心に伝えられた正史に於いて「朝敵」として断ぜられた将門を、坂東の人達はその真実を承知しており、「将門は絶対に朝敵などでは無く、親族内の紛糾から全く虚構の讒言が京都に伝えられたために陥られたのであり、我々坂東人は最後まで将門様を尊敬し守り抜きたい」との雰囲気であった事は知られている。その詳細については他に譲るが、その将門の暴れ回った地点がこの筑波山界限なのである。その伝説の一つに次のようなエピソードがある。

将門の叔父良兼には良子姫と言う美しい娘がいた。将門の父が生前の頃から、将門とは許婚の間柄であり、

事実二人は愛し合っていた。ところが父が死して後、その所有地の全てを横取りを画していた良兼は、当時常陸大掾であった源護という豪族の息子の扶に嫁がせる事にしてしまった。これを知った将門が、婚礼の日在花嫁が通る道で待ち構えて、その行列を襲って良子姫を強奪して、いわゆる略奪結婚するのが将門の乱の始まりであったのだ。良子姫はそのことを非常に喜び、その後全面的に将門に協力したのであった。実はその強奪現場と言うのが筑波山の南麓多気（現在のつくば市北条、即ち私の出生地）の小山（現在の城山）を基地としての話であった。その城山に何かと注目すべき巨石の群れがあり、同時に今では私以外には誰も知る筈の無い神秘の洞窟も有り、その中には間違いない数多くの武器が隠されていると私が信ずる理由もある。と言う次第で、会員の皆様には一応ご関心を持って頂きたいと存ずる次第である。

更には「筑波山案内」には必ず出てくる所の「立身石」「弁慶七戻り」

「ガマ石」など、巨石研究には事欠かないのが筑波山及びその界限ではなからうか。その様な探査を行う時には原則として先ず「その地に住む古老」から話を聞くべき、とされるが、私の場合「その地に住んだ古老」であるので、一言所感を述べさせて頂きました。高齢のため皆様と共に完全同行は無理かも知れませんが、ある程度までは協力可能と存じますので一言。

（将門関係記事は、拙著「超航海・英雄伝説の謎を追う」1995年・三交社版に掲載）

了